第16回スタディーツアー日記

２０１８年1月12日（金）～1月23日（火）

バングラデシュへは７回目になる。「何のために行くのか」ではなく、「行きたくないのになぜ７回も行くのか」だ。

行きたくない理由は、７０歳にもなっているのにバングラデシュに行くと未だに自分のダメな部分をいっぱい感じさせられるからだ。

いちばんは、しゃべれないこと。タリクさんやヤスミンさん、アナスやロシュミアにも声がかけられない。対面しないように避けてしまう。「言葉ができなくても心は通じる」などと自分に言い聞かせるが、この居心地の悪さは情けない。

しゃべれないだけではなく、言葉のバトルができない。大西さんとタリクさんのジョークのやりとりは、知らない人が見たらハラハラするぐらい激しいが、冗談を交えながらのやり取りで論議を深めているのはすごいと思う。ぼくはそれができない。食事のあとの雑談で結婚のことが話題になった。タリクさんはルニさんとお見合い結婚。「恋愛結婚がしたい！」というタリクさん。ぼくが恋愛結婚だというので、「どうしたら恋愛結婚できる？」とからかい半分で聞かれることになった。こんな時なにかしゃれたジョークで返せたらいいのに、マジになって言葉につまる。照れ笑いでごまかすがそんな自分が情けなくなる。

怒れない自分を感じさせられるのも嫌な理由。大学卒業の時、後輩にもらった色紙に「怒れ先輩、先輩怒れ」と書かれた。その言葉は５０年たった今もことあるごとにぼくに突き刺さる。大西さんがＣＮＧの料金でいつも公正な料金にしろと怒る。ミナコ奨学金で公正でないことがあれば怒る。軟弱な自分は情に流されたり、うやむやにしてしまう弱さがある。日本での日常生活でも似たようなものだが、バングラデシュという非日常の場では、自分の人間性みたいなものが露わになるということなのだろう。

こうやって嫌だなあとうじうじ考えながらも、行くことにするのはなぜか。

バングラデシュの貧しくたくましい人たちの生きる力に敬服するから。美味しいカレー料理を満喫できるから。ワンドロップ小学校の子どもたちのことがかわいくてたまらないから（笑）。

１月１２日（金）

関空発１４：００　広州着１７：５０　広州発２１：１５　ダッカ着２３：２０

広州の空港では時間待ち４時間。折り紙の練習をしたりして時間を過ごす。

ダッカの空港では、いつものラジアさんのお父さんが迎えに来てくれて安心。ラジアさんは、男の子が生まれて５か月になるという。

ダッカの町は、乾季で埃まみれ。前が霞んで見えにくいくらい。深夜なのに交通は相変わらず猛烈に激しい。

１月１３日（土）

７：００朝食　７：４０ホテル出発

・シアタークラスのフォジルさんと合流してダッカ市内の小学校を訪問。プレスクールも見る。大西さんと山村さんが子どもらと一緒に手遊びをしたりして活躍。貧しい子どもらがいきいきと活動するのが気持ちよい。

・シアタークラスの奨学生リピ（カレッジ１年生）の学校を訪問。兄のフォジルが自分の妹リピを奨学生に選んだことでぎくしゃくして、この間彼女の表情も陰りがちだったが、今日はしっかりした表情で笑顔もいい。他の学生の前で誇らしげだ。

ただ、なぜフォジルは私たちを妹の学校に案内したのか。奨学生の担当者として生徒の事情をよく知ってもらうためには、母の看病で単位が取れなかったアカシの学校を訪問するべきではなかったのか。フォジルがそうしなかったのは疑問だ、という話になった。

・シアタークラスの子らに会う。

シアタースクールに行く途中、自国の言語、ベンガル語を守る運動を記念するモニュメントに寄る。シアタークラスの子らが中心になって、モニュメント周辺の掃除をしていた。バングラデシュの歴史などに不勉強でどういう意味を持つものか、またシアタークラスの子らがボランティアで取り組むことはどういうことかよくわからないまま掃除につきあったが、ともかくシアタークラスの子らは、ふざけ合ったりしながら楽しくいきいきと活動していた。

・シアタースクール訪問

8歳～18歳の約30人が集まっている。

＊奨学生アカシは、母が病気のためその世話で進級テストに失敗、留年。

＊ぼくの奨学生ポーリーは、プレゼントを手渡すと、はにかんで微笑むのがかわいい。（みんなでゲームをして楽しんでいる時にしかつめらしい固い表情をしていたのがちょっと気になったが、これは彼女の人柄かも？）
＊奨学生の多くが、学校が忙しいので今日は来ていないのが残念。
・パフォーマンスを観る。彼らのダンス、演技はいきいきと躍動的でいいけれど、言葉を理解できないせいもあるが、激しくリズミカルな動きばかりが目立って、しっとりとこちらの心に響いてくるという感じがしなかった。
・サバさん（ヤスミンさんの村の女性。カレッジ一年生）の家で、今夜招待されているプレ結婚披露宴の準備。
女性３人が、着付けと化粧に行っている間、高橋さんと折り紙をしながら時間待ち。男二人で折り紙をしているのは奇妙な光景だ。ハードな化粧に２時間以上待たされた。
・結婚披露宴は、あまりに豪華で落ち着かないが、おいしいバングラデシュ料理が食べられるのだけは楽しみ。

１月１４日（日）

８：００ホテル出発　ナワブゴンジュの村へ。ヤスミンさんがインドへ出張していて留守なので、この日は奨学生アキさんの弟、シハブさんが同行してくれる。

道中の激しいドライブのため山村さんが車酔い。ヤスミンさんの家で少し休んだあと小学校を２校訪問。
ノヨンら奨学生６人が案内してくれる。最初に出会った頃とくらべて体格も大きくなり、表情もすごくしっかりしてきた。ここでも、大西さん、山村さんのパフォーマンスに子どもたちがいきいきとした表情を見せてくれる。奨学生らが文房具の配布を手伝ってくれる。小学生を前にしてあいさつする時、自分たちがその学校の先輩であることを言いながら、子どもたちにしっかり勉強に励むよう話しかけているのがとても頼もしかった。
もう一つ、少し離れた小学校を訪問。日本で「ナーサリー」というのか、小学校に入る前の幼児が一年弱、１日２時間ほどの学校生活を体験するクラスを見た。山村さんは、大学でプレスクールの教育について研究しているそうだ。日本とはまったく違った貧しい環境での教育活動を見て、研究の参考になることがあればいい。
この学校に行く際、ＣＮＧを頼んだ。予測したとおり往復 400 タカをふっかけられた。大西さんが、外国人に対する不当な価格を容認しないで突っぱねた。400 タカがどうなのか、ぼくにも少し高すぎると感じたが、300 タカにするように、間に入ったシハブさんが粘り強く交渉してくれた。相手も引き下がらないので、シハブさんが、自分が 100 タカ負担しようかとまで言った。こんなとき気が弱いぼくは、貧しい労働者が自分たちの生活要求をしているのだから、ふっかけに乗ってあげてもいいではないかと思ってしまう。ヤスミンさんの家の男性にも応援を頼んだが譲ろうとしないので、結局 400 タカは払うことになった。大西さんの強い意志には敬服するが、軟弱なぼくにはとてもできない。
・タンハとアントラダス、二人の家を訪問。

タンハの家はもちろん貧しい暮らしぶりなのだが、兄がいて、大きなスピーカーが置いてあったり、ロードバイクがあったりして、ちょっとどうなのかという感じがした。
家庭訪問からの帰り道、広々とした畑に菜の花が咲き乱れていた。移動の車からは水田で田植えをしている風景が見えた（50 年も前の日本のように人の手で植えていた）。今回のダッカは、ホテルのベッドが冷たくて寝られないほど寒かったが、菜の花が咲き、田植えが行われていて、「春は名のみの風の寒さや～」の早春の風景だった。（この冬の寒さで、凍え死ぬ子がいるのがここの現実だが。）
・ホテルに帰る
１８：００　ライサさんとその友人のミーシャさん（アーティスト）に会う。
ライサさんは、ダッカ大学を卒業して政府機関で微生物の研究をしている。８月には研究者としてオーストラリアへ行くそうだ。ミーシャさんは、東京でギャラリーを開催する計画があるらしい。
遅れてジョニさんもホテルに来てくれる。伊藤忠のダッカ支社で働いている。日本の教育に心魅かれて、将来自分の田舎でプレ小学校を作りたい夢を持っている。
２０：００　ホテルで夕食。
ライサさんやジョニさんらが人並み以上に頑張って努力して研究者になり、芸術家になり、夢実現を胸に秘めつつ一流企業で働いている。みんな努力によって立派になってすごいという話になったが、ぼくはまた極めていびつな個人的な感想を持ってしまった。
「人は努力して立派になれるのだろうが、そうなるにはその人の持って生まれた素質もある。ぼくはどちらかというと、生まれつきの素質もなく、あまり努力もせず勉強もせず、日銭稼ぎの肉体労働者として一生を終える大多数の人たちの方に共感を覚える」などと、訳の分からんことを言っていた。

そう言えば、「山中さんがバングラデシュに行くのは、そこになんかええことがあるからやろう！」とちょっと下品な目的があるかのように匂わせながら村の人に言われた。

「何かええこと？」そう、その一つが、貧しいながらも黙々と体を張って暮らしている人たちにとても親近感を覚えること。道路工事をするのも、荷物を運ぶのも、田植えも機械を使わず、リキシャで後ろに 3 人も 4 人も乗せてペダルをこぐ人のやせて細い筋肉だけの体にも圧倒される。働いているのか遊んでいるのかわからない程度にのんびり過ごしている姿にも共感を覚える。アメリカやヨーロッパの洗練されたところ（とぼくが勝手に思っているだけ）へ行くよりもここが居心地よいのだ。

「ぼくは 30 年以上神戸の定時制高校で働いていた経験から、被差別部落や在日朝鮮人たちの荒っぽくて時には無茶を言ったりもするが根は情に厚くてやさしい人たちが好きなんだ！」などと、スタディーツアーの食事の時に、酒も飲まないのに毎回一度はこんな偏った変なことを言ってしまう。

１月１５日（月）

７：００起床　公園散歩。８：００ホテルの朝食

ぼくの奨学生フマヤンに会う日。10 時の約束でホテルの部屋で待つが、なかなか来ない。前回も待たされた。また今度もか。交通事情の悪い遠い所からバスで来るにしても困ったこと、などとぼやき合っていたら、１０時に来て下のロビーでずっとぼくらを待っていた。失礼しました。

彼と会ってもベンガル語はもちろん英語も話せないから、大西さんがいなければ言葉が出ない。何か言わなければと、スマホの翻訳機能で言うことを英語にしておいた。さすがスマホ。英語のメモを見ながら彼の前で読み上げたらどうにか通じた。（英語からベンガル語の通訳はホテルのスタッフがしてくれる）

カラーペンのセットと、前回彼の村を訪問した時の写真をプレゼントする。

ＳＳＣの試験で数学だけ不認定になっていたテストが２月８日にある。４月ごろ結果発表。もし合格していたら、今年７月のスタディーツアーでまたマイメイシンに行って合格祝いのパーティーをするから頑張れ、と励ます。（そのあと彼は激しい下痢、嘔吐、発熱でコレラ病院に入院した、と連絡が入った。「コレラ？」だったら大変だと慌てたが、細菌性のものだったのか一週間ほど入院して退院。）

１１：１０　マザーテレサの教会（死を待つ人の家）に行く。

障害を持って生まれた子、親の世話を受けられずに生きる場所をなくした子、回復の見込みのない重病の人らを受け入れている。「見学？」どんな気持ちで行けばいいのか戸惑いながらの訪問だったが、案内してくれたシスターのやさしい笑顔に救われた。

ホテルへの帰り道、いつもの市場の風景を見て、マーケットでパン、チーズなどを買ってホテルで食べることにする。

１６：００　大西、山村二人は民族衣装を着つけてもらいに行く。高橋ゆう子さんは自分で着物を着る。

１８：００　アニカさんの結婚式（本番編）に参列するためにホテルを出発。

6 時半に結婚式が始まるということだったが、いっこうに始まる気配がない。参列者は７００人というが、まばら。舞台では花嫁のアニカさんの写真撮影が延々２時間も続いている。結局結婚式には参列できず、食事にもありつけずに退席、９時半山村さんをダッカ空港へ見送る。

１月１６日（火）

８：３０　ホテル発コミッラへ

ワンドロップ小学校に行く。校舎の２階部分ができていてどっしりと、すごく学校らしくなっている。学校の左手のタリクさんの土地に日本茶の畑を作る作業をしている。学校周辺が広々となっていてよい景色だ。

２時頃、タリクさんの事務所に戻って昼食。ぼくらの希望で、牛肉のカレーにダルスープ。美味しい！

１５：００　学校再訪。文房具の整理をする。雨が続いたため湿気で教材などが湿ってカビが出ている。かび臭くて気色悪いが、がんばって整理。この部屋は管理のため先生らは中に入らないようにしてあるらしいが、せっかくの教材、教具が使われないまま放置されているのはよくない。先生らが授業に使用できる方法を考えなければ。

タリクさんのマンションに帰る途中、新一年生が昼食で使うプラスチック皿を購入する。タリクさんは、運動会の賞品を買う。プラスチックの水筒や皿など日用品を賞品にするのがいい。

１月１７日（水）

８：３０　ホテル発　９：１０　ワンドロップ小学校

寒くて霧がこんでいる。生徒の登校が遅れている。１年生は５人、２年生は１０人、３年生は１５人ほど。

三々五々集まってくる。寒そうにしているのでラジオ体操をして体を温める。生徒は真似をして手足を動かしてくれるが、音楽がないのでこちらが間違えてしまう。次回、「ラジオ体操」のＣＤを持って行こう。

・朝礼。国家斉唱。歌詞は詩人タゴールのものでとてもいいらしいが、メロディがだるい。全曲歌うと３０分ちかくかかるという。ここでも５分以上歌っている。高校の式典では「君が代斉唱」を拒否し続けてきた。他国の侵略から国を守る意思を歌うのはいいが、他国を侵略することをほめたたえる君が代は絶対だめだ。タゴールの詩を読んでみよう。

・ゴミ拾い。グランド周辺にゴミが散らかっている。ときどきゴミ拾いをすることにしたら、ゴミはどこにでも捨てていいという癖はなくなるだろう。教室に入って汚れた机椅子を拭かせる。雑巾も用意しておかなければ。

・翌日の運動会の練習。バングラデシュの種目の他に、日本の種目を入れる。１年はスプーンレース。２年はリレー。３年は２人３脚。

リレーは、ルールが伝わらず混乱する。コースをはずれて近道をする者や、誰にバトンを渡すかわからないでまごつく者がいる。何をするにも「我先に」となるが、だんだんレースのことが分かってくると、友だちに拍手声援を送るようになって、ほほえましい。

２人３脚も、はじめは要領を得ずペアの動きにもお構いなし。強引に相手を引きずりまわしてバラバラ。２回、３回と練習しているうちにリズムが取れるようになる。

１１：３０　ランチ

・明日の入学セレモニーのために教室の飾りつけをする。３年は１年を指導しながら紙テープでチェーンを作る。２年は紙花作り。３年の５人で「くすだま」作り。

１２：００～１２：３０　バングラデシュの種目の練習。

１３：３０　生徒下校

１４：３０　タリクさん事務所。

４人の先生と、タリクさん、大西さんとでミーティング。管理職と教育労働者が対面してにこやかに交渉しているようでとてもいい。

１５：００　**奨学金支給**

２人の女子が結婚のため昨年８月から支給ストップ。（去年７月には、結婚のことは言わずに奨学金を受け取っておいて、ちょっとおかしい！と）

２人の男生徒は学校をやめて仕事をするようになったので８月からストップ。

もう一人、数学の単位を落として留年したシャハダ。留年したが勉強を頑張りたいとタリクさんに申し出ていたらしい。支給日の今日、単位を落とした件について問われて反応がよくないまま、すごすご帰ってしまった。後日１月２０日、高校時代の友人二人を伴ってタリクさん事務所に来た。高校生二人は、シャハダが学校に戻ってくるよう説得したいらしい。大西さんとヤスミンさんが彼の考えを訊ね、教育が大切なことを説いたが、月１，０００タカの支援では生活が賄えないから働くことにする、と考えを変えなかった。

１月１８日（木）

８：３０発　９：１０ワンドロップ小学校

整列してラジオ体操、朝礼。その間、くす玉を玄関に設置。

・運動会

ルールや指示が通らないことも多々あるが、みんな精一杯がんばって楽しんでいた。去年は、生徒も慣れてなく、こちらも要領が悪くてドタバタしたが、今年は段取りもよく、とても運動会らしくなってよかった。

運動会でよかったこと。スイカ割り（ここでは陶器のナベを割る）に先生だけでなく校務員のおばさんも参加し、表彰式にも出てもらっていたこと。とてもさわやかに感じた。

・１２時ランチ。タリクさん事務所で作ったランチが事情で届かず、予定変更。教室に入って入学セレモニーを先にする。玄関奥に１、２年生が待機して１年生を迎える。ルニさんがくす玉を割り、入って来る１年生の首にキャンデーレイを掛けてあげる。

１年生には、バッグ、文房具、教科書、制服上下などを渡す。

そのあと、ヤスミンさん、ヤスミンさんのお姉さん、大西さんらが中心になって、歌、リズムダンス、自己紹介などをして楽しく過ごす。

・２時頃、ランチが届く。野菜のビリヤニ１５０食分。生徒もたくさん

よそってもらっている。残して家の人に持って帰る子もいるのが切ない。生徒の保護者や地域の人は最後に食べる。ぼくらは工事中の２Ｆ屋上でのどかな風景を眺めながらの贅沢なランチ。（今回は、コミッラの奨学生は招待されていない）

・去年２年生に在籍していた男子生徒一人、７月頃親がワンドロップ小学校を嫌ってイスラムの宗教学校に転校させた。子どもはその学校を嫌がって行こうとせず、ワンドロップ小学校に来て泣いてばかりいた。ワンドロップ小学校の教育を拒否して出たものを、戻りたいという保護者の考えを確かめなければと、いったん受け入れを保留。運動会のあと両親が来て面談。話し合いのうえ１先生として認めることに。その面談の周りを生徒らが取り巻き見守っている。戻れることが決まると、みんなで歓迎の拍手。この学校の大事なことを生徒、保護者みんなが確認し合うことになってよかった。

奨学生の場合でも、ワンドロップ小学校の場合でも、良い子が選ばれて良く成長していく場合もあれば、子どもや親に裏切られたり、無作法なこと、人の道にそむくようなことも起こり得ること。こういうことはバングラデシュだからというのではない。日本でも、どこにでもあることで、それらと格闘しながらまっとうな道に近づいて行くのが教育。ミナコ奨学生でもワンドロップ小学校の生徒でも、貧しくても学習意欲がある、選ばれた生徒のはずなのにどうして、という発想そのものが間違っているのかも知れない。

１８：００　高橋さん夫婦とヤスミンさんのお姉さんがダッカへ向かう。（高橋さんは明日午後、バンコク経由便で日本へ）

１月１９日（金）

８：３０発　良い天気、スモッグなし。　９：００　学校（生徒は休日）

・ヤスミンさんが、４人の先生の指導をする。

・その間、大西さんと二人で校長室の中のものを片付ける。雨水に汚れたプラスチックケースを水洗いして乾かす。カビの吹いた鉛筆を布で拭いて日向に干す。

３年生の男の子がそばに来て鉛筆を拭くのを手伝ってくれる。校務員おばさんは、とても丁寧に要領よくやってくれる。

翌日（２０日）のカリキュラムを決めて終わる。

１４：００　タリクさんの友人の婚約パーティーに連れて行かれる。コミッラのはずれの田舎で、広い敷地にゆったりした屋敷。マンゴーの木もあり、池には魚も飼ってある。

２０人ほどの席が用意されていて、豪華なランチをいただく。普段着のままで居心地が悪かったが、丁重にもてなしてもらった。婚約の儀式には、両家の親族が向かい合って座り、花嫁の持参金の金額の交渉などもするというのがおもしろい。

夜、ワンドロップ小学校のことでタリクさんと議論。

１．ランチ

今のものではもの足りない。ビリヤニかキチュリができないか。先生らの意見を聞いたヤスミンさんが提案する。

その場合、コストを減らしても１食１５ＴＫ→１日で６５食×１５ＴＫ＝９７５ＴＫ→１か月で９７５×２４日＝２３，４００ＴＫ→１年間で２８０，８００ＴＫ（４０１，０００円）

現在のランチは、１食１０ＴＫ、１年間で１８７，０００ＴＫ！

こんな計算をしながら議論の末、タリクさんが月に一度ビリヤニを作って出しているので、当面はそれでいいことにしようということになった。

２．教員のサラリー

ラブリーさん　　５，０００ＴＫ
ナジマさん　　４，５００ＴＫ
ジャスミンさん　　４，５００ＴＫ
ファルジャナさん　４，０００ＴＫ
１年間（４人）で約３６８，０００円

公立学校の先生のサラリーと比べて、今の給料では他にアルバイトもしなければならない状態で安すぎる、とヤスミンさんが先生らの意向を伝える。

大西さんの考えは、ワンドロップ小学校は、ボランティアの学校。だから、先生もボランティア教員という立場で考えればよい。それに、今の先生らには公立学校の先生になるための資格、指導力がない。力があるなら、やめて公立に行けばいい。公立の先生に見合う力を４人は持っていない。やり方もルーズだという。

ぼくは、４人の先生の資格、力量がどうなのか分かっていない。先生らは子どもらと楽しく勉強しているからいいではないか、と思ってしまう。ぼくらやタリクさんらはボランティアでいいが、先生方は「労働者」だと思う。日本からの資金は、ワンドロップがバザーでカレーを売ったり、カンパを募ったりして苦労して集めた貴重な金である。労働者には正当な給料を支給しなければならないとは思うが、ない金からやりくりするのは大変ではある。

結論は、今の基準でいく。７月に昇給かどうか決める、ということしかない。

３．ＨＲ担当

クラス１＝ラブリー

クラス２＝ナジマ

クラス３＝ジャスミン（サブにファルジャナ）

＊開校から３年（６０人）までは、ワンドロップでなんとかするが、そのあとはまた協議をすることに。

今後、資金面での支援のあり方について、難しい課題を抱えることになる。

１月２０日（土）

７：１０　アナスとコミッラの駅までジョギング。アナスはずっとぼくのことを気づかいながら走ってくれる。

８：３０　出発　９：１０学校着

寒いからか今日も遅れてくる子が多い。

朝礼がすんで教室に入るころには、６０人全員そろっている。身長、体重を測定し、名簿順に個人写真も撮る。

木玉でブレスレット作り/英語・ベンガル語の授業/グランドで体を動かす運動/歌をうたう/グランドで縄跳び/お絵描きなど、楽しく過ごしている。

１、　２年はランチのあと１時間授業をして帰る。３年はもう１時間。

放課後、４人の先生が授業担当、カリキュラムのことなどを相談している。ぼくは、校庭で校務員のおばさんとカビの生えた鉛筆を布で拭く作業。木珠も去年ブレスレット作りに使ったままでカビがついている。ザルに入れて水洗いして干す。

・家庭訪問

ワンドロップ小学校の生徒の家に行く。

クラス３、ジャキア。お父さんが病気でベッドに寝ている。若いお母さんは体調が悪くなると発作を起こす。おばあさんが世話をしている。

クラス２、ナズムル。極端に貧しい。土間にベッドはなく、地べたにそのまま寝ている。６人の子どもは、両親がいなくて祖母が面倒を見ている。祖母は「ものもらい」をしている。食事もあまりとれていない。寒くて病気になりそう。支援物資のエプロンをあげることにする。

クラス３、ビスティ。本人は恥ずかしくてどこかに隠れていて出てこない。若いお母さんは、タリクさんの農場で働いている。お父さんは足に釘が刺さったのが原因で両脚切断、車椅子の生活。

重苦しい家庭訪問だったけど、近所の人たち、子どもたちがいっぱい集まってきてにぎやか。貧しい暮らしだけど、菜の花も咲いて景色はとてものどか。

タリクさんの事務所で昼食。そのあと、改装中の建物を見に敷地の奥の方へ行くと、ファルジャナ先生がいる。庭を掃除している。彼女のお父さんは、タリクさんの所で技師をしている。母は病弱。ファルジャナさんは、６年前に、お父さんからワンドロップの活動について聞き、大西さんの写真を見て心を打たれたという。今は経済の勉強をしているそうだが、銀行員などになるよりも教育関係の仕事をしたいという。ワンドロップ小学校で子どもたちと勉強するのが楽しくてならないらしい。すがすがしい表情がとてもいい。

ハプニング！

今回のスタディーツアーに行く前から、タリクさんが「ハプニングがあるぞ！」と言っていたらしい。誰にも秘密。家族のみんなにも内緒だったらしい。

この日、マンションに帰ったら、長髪を後ろで束ねた日本人がいた。イエスキリストみたいな風貌。愛称は、ケンさん。バングラデシュなどいろんな所で学校建設の活動をしているヤツシさんの紹介らしい。篠山に住んでいる。日本建築の仕事をしている。タリクさんも篠山が大好きで、学校の周辺に日本風のリゾート施設を作る夢を持っている。彼にその計画を進めるにあたって下見をしてもらうために招いたらしい。

ギターを弾いて歌がうたえる。さっそく沖縄の歌をうたいだして、マンションのリビングでみんなが踊りだした。恥ずかしがりのぼくも

照れながら輪の中に。明日はワンドロップ小学校で演奏会が楽しみだ。子どもたちはきっと大喜びだろう。
　それにしても、ワンドロップ小学校が、いくら和風のものとはいえリゾート施設に取り囲まれるのは落ち着かない。子どもたちの貧しい住まいはどうなるのか。遠慮がちに学校に通う子どもらのことを考えると、この計画には賛成しがたい。

１月２１日（日）
９：００すぎ出発。９時には学校が始まるのに、バングラデシュ時間はルーズ。人を待たせても平気。待たされても怒らないということか。
　１０時ころ学校に到着。子どもらは朝礼をすませて教室に入って勉強している。
　１１時、ケンさんが来る。ケンさんの歌とギター演奏は子どもたちの心を揺さぶって、みんなノリノリで歌い、叫び、踊りだす。「イマジン」や沖縄の歌は、小学校低学年の子どもたちにはちょっと合わなかったみたいだけど、「どんぐりころころ」の歌詞をベンガル文字で板書して歌ったりして盛り上がる。バングラデシュの子どもたちの体の中にはとても豊かな音感、リズム感があって、それを上手に引き出していく音楽の授業ができたらすごいと思う。
　昼食のあと、午後１時間授業で１、２年生は下校。３年生はもう１時間授業。
　放課後、先生４人に「授業担当」、「時間割」の原案（大西、ヤスミン、山中の３人が昨夜遅くまで四苦八苦して組み上げたもの）を見てもらい、了承を得る。このカリキュラムで学校生活のリズムができればとてもいい。

・学校からの帰り道、昨日家庭訪問した２年のナズムルの家に、支援物資のエプロン６枚を届ける。少しでも寒さをしのげられたらと思う。
　タリクさんの事務所でケンさんも一緒に最後のランチ。ぼくらがリクエストしたビーフカレー、ダルスープ、ポロタ。いつも美味しいバングラデシュ料理をありがとう。
　４時ころコミッラを出発してダッカへ。ラジョンさんの運転はすごい。小気味よい。市内に入って少し渋滞があったが、わりとスムーズに帰れた。７時半ホテル着。

１月２２日（月）
７：００　いつもの公園でジョギング４周。
９：４５　ヤスミンさんに案内してもらって、アーロンで蜂蜜を買う。ヤスミンさんにフマヤンの様子を電話で聞いてもらう。今日ダッカの病院を退院してマイメイシンに帰るという。数学のテストの激励をする。
１６：３０　アニカさんがご主人と一緒にホテルに来てくれる。やさしそうないいご主人だ。アニカさんの家のドライバーだったので、無理を言ってグルシャンの市場まで乗せてもらって最後の買い物をする。
１８：３０～２０：００　ジョニさんとライサさんが来てくれる。ライサさんは、８月ころ研究者としてオーストラリアへ行くことになったらしい。ジョニさんが寂しそう。
２１：００　チェックアウトしてダッカ空港へ。

１月２３日（火）
　中国南方航空、広州乗り継ぎで、１３：００関空着
　乗り継ぎ時間が短かったので、ぼくのバッグだけ届かず、翌日午前中の宅配になった。
　日本はとても寒くて北風が強い。ベイシャトルが欠航。バスでポーアイまで行く。関空に着いてから４時間もかかって、家に帰ったのは５時半を過ぎていた。
　（バッグは、無事に翌日昼前に届いた。）

　ワンドロップ小学校の子どもたちとは３年目。言葉も交わせないのに親しくなったようで、とてもかわいく感じた。子どもたちは明るく元気で、学校が楽しくてならないみたいだ。家では食べるもの着るものにもこと欠く貧しい生活をしている彼らにとって、この学校がどれほど大切な場所か、と強く感じた。
　別れるとき、「また７月に会いましょう」とみんなに言っていた。一人で飛行機にも乗れないし、言葉もしゃべれない。行きたくないけど（笑）また行くことになるのだろう。

２０１８．１．３１
山中　勇